

## 「授業評価 2015」から見えるもの

去年、初めて巻頭言を担当するにあたり、「読まれてこそその授業評価」という雑感を記した。書いた手前、責任もあるので、今年（これを記述している3月15日現在、読める範囲で）の分を一読してみた。思いの外、学科・教員毎の個性がにじみ出ていて興味深かった。

アンケートから読み取れる結果を淡々と分析しているものが最も多くを占めているが、中にはアンケートに答えてくれた学生に一つ一つ教員の思いを回答しているもの、教室の改修や担当者の交代に伴って、次年度には改善されるように引き継いで行く旨、回答しているもの、そして学生へのアドバイスが記述されているもの、など、読んでいて飽きなかった。

全体を通読しての感想は「やはりこれは全ての学生と教員に読んでもらおうべきだ。」であった。授業評価は、学生によるアンケートへの回答とそれに対する教員の考察、から成っているが、現状ではその先の展開が個々の授業の改善に留まっている。もっと、この「授業評価 2015」を読んだ教員や学生から、工学部の教育全般に関するざっくばらんな意見が出てきて良いし、読んでもらえればそのような意見が確実に出てきそうな内容となっている。さらには、そのような意見を俎上に挙げて、議論をする場を設ける必要があるのかもしれない。日頃ルーチンワークに忙殺されている教育委員会に新しい仕事を増やすのは心苦しい面もあるのだが、2016年度に単発でも、堅苦しくない議論の場が必要、という気持ちが強くなっている。学生と学部長との懇談会の際に、話の取っ掛かりとして、「授業評価 2015」から抽出された意見を採り上げてみるのも良いかもしれない。

実は、2017年度には工学部の改組が予定されている。現役の学生には影響の及ばない話かもしれないが、大学院の組織も変わるので、進学先の名称は確実に変更となるし、学年進行で開講科目も変わっていくので、まったく影響が無いとは言い切れない。この「授業評価 2015」は、新しい授業を組み立てる際の指針にもなるのではないかとさえ感じている。それほど、中身は濃いのだ。

そんなわけで、工学部の全ての学生の皆さん、教員の皆さん、是非一度、「授業評価 2015」を読んでみて下さい！

2016年3月

工学部副工学部長（教育担当）

高橋 徹

## 「授業評価」を想定外に活用しませんか？

本年度の授業も無事終わり、ここに「授業評価2015」をまとめることができました。アンケートに協力して頂いた学生の皆様、アンケート結果にコメントを添えて「授業評価」を執筆頂いた教員の皆様、また、Webアンケートの運営支えていただいた檜垣泰彦先生（都市環境システム学科）に、工学部教育委員会としてこの場を借りてお礼申し上げます。

早くも東日本大震災から五年が経ち、その復興が連日メディアで取り上げられています。我々は、この震災の教訓として「想定外」に対処しないといけないことを知りました。

想定外は、決して災害、社会不安、経済危機だけでなく、学生個人の勉強や研究生活、さらには就活や人生そのものにもやってきます。一方で、残念ながら、学生の皆さんは、大学入試で過去問相当の問題（つまり想定内の問題）が解ける能力を鍛えてきました。毎年の講義でも決して試験に難問を出したわけでもなく‘ちょっとひねったこと’が、多くの学生さんの想定外になることを知っています。やっぱり「講義のやり方がまずく、学習効果が低かったのか？理解してもらえなかったのか？」と自問してしまいます。

現在、教育メディアでは「グローバル」のみならず「アクティブ・ラーニング」や「反転授業」などの言葉が流行語のように踊っています。大学のみならず教育の現場では、従来の教員が板書しながら学生に一方的に話をする講義スタイルは、学習効果が低いと指摘されています。私自身もアクティブ・ラーニングを授業に取り入れれないといけないのかとプレッシャーを感じます。でも本質は、その講義科目が効果的な講義になるように継続的改善することです。そのヒントが「授業評価2015」あると思います。

誰のために「授業評価アンケート」をやって、誰のために「授業評価」を書くのか？

受講した学生さんは、もう一度自分が受けるためではなく、後輩のためにアンケートに協力してくれています。でも教員の書いた授業評価を見て、その考えや思いを後になって理解できても、不可の評価でないかぎり、その科目の学習には二度と活かさせません。

したがって、大事なことは、「授業評価2015」が次の2016年度の授業情報となり、次の受講生の「想定外」に備える心構えになること、別の教員が担当する別科目の授業改善に「想定外」に活用されること、それが無いともったいないのです。「授業評価」が、工学部の学生と教員の共有財産として、次年度に有効に活用されることを願っています。

最後に、次年度から新たな全学の教務システムが導入されることから、今後どのように工学部として授業アンケートや授業評価を運用するかは議論の必要なところではあります。是非、建設的な意見を工学部教育委員会へ届けて頂ければ幸いです。

2016年3月

工学部教育委員会

委員長 赤染 元浩